一西哲勃郎合爾都肖像　中屋伊三郎鏤　文政六年　一枚
一東京隅田川月見景原版　昇進堂　一面

奉天　黒田源次氏

一自上野望山下　亞歐堂　一枚
一ゼルマニア廓中之圖　筆彩亞歐堂　一枚
一亞歐堂肉筆銅版下繪　四枚
一玄々堂銅版下繪帖　一冊
一玄々堂銅版畫帖　中伊三郎　文雅堂其他　二帖
一大日本國掌覧全圖　梅川夏北銅鐫　弘化三年　一舗
一銅版耕織圖　縮刷上下　二冊
一パルヘイン解剖圖譜　上下　四冊
一父子相迎　一冊
一蘭療方　一冊
一蘭療薬解　一冊
一司馬江漢畫像　自畫像　一面
一駿州八部富士　司馬江漢銅刻　一枚
一江戸名勝　安田雷州銅鐫　八枚

○

大阪市　直井精一氏

一銅版帳　玄々堂撰　二冊

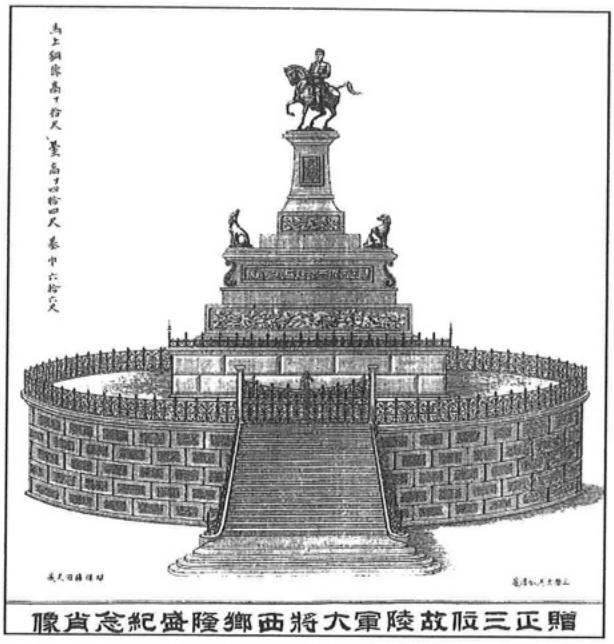
西郷隆盛像建設経緯寄与――自業自得の夏

森　仁史

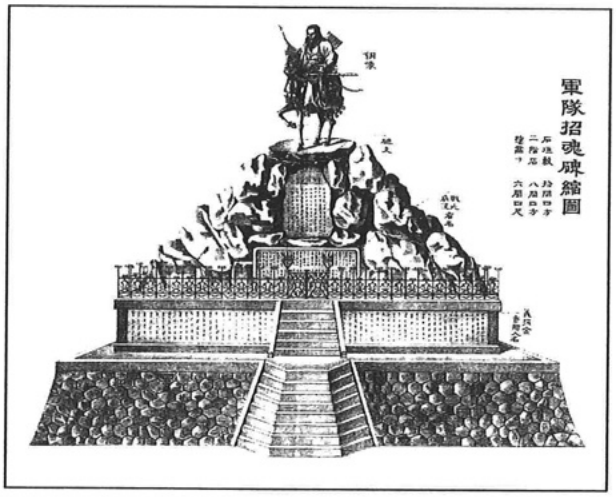
予想されたこととはいえ、展覧会前の忙しさは格別である。加えてこの暑さである。今回はちょっと考えてみたいテーマがあったのだが、とてもそんな余裕がない。また、幾つもの論考をこなすまでの才もないし、絶妙の掘り出し物を探し当てる根もないことを悟って、かつて丹尾同人に紹介するよう勧められた版画をご披露しておくことにする。

「故西郷隆盛翁建碑広告」〔図1〕と題するもので、洋紙に石版印刷され、印刷所は横山町の三楽堂という。中森同人もご存知ない印刷所らしい。京都の植田楽斎が明治二十二年に呼びかけたもので、二月の憲法発布に当り他の維新功労者とともに西郷には正三位が追贈され名誉回復されたので、こうした計画が持ちあがったのであろう。植田は堂上公家嵯峨実愛の弟で、反幕府派として活動し西郷とも面識があったらしい。霊山歴史館にも「西郷翁記念碑建設目論見ニ関スル書類」が所蔵されているから、確かな話のようだ。

西郷という人物は西南戦争によって人望はむしろ高まり、大谷同人が近頃ご執心の田中智学も感銘を受けているくらいの国民的人気だった。死後、明治十二年六月に勝安芳は友人として南葛飾郡木下川薬師に「不使府下百万生霊陥塗炭」と感謝の意を表す石碑を建てた。河川の氾濫のため、大正十三年に馬込の洗足池畔の勝夫妻墓所の隣に移され、西郷隆盛留魂碑として今も残っている。なお、西郷死後遺体を浄光明寺畔に埋葬したのは県令岩村通俊であり、以前触れた岩村透の伯父である。そして現在の上野公園建立の銅像建設は毎年九月二十四日に追悼祭典を催した吉井友美が中心となった。



1　故西郷隆盛翁建碑広告



2　軍隊招魂碑縮図

ご参考までに石碑広告文を次に写しておく。

贈正三位西郷隆盛翁ノ国家ニ功労アル普ク人ノ知ル所ナリ　今京都東山清水宇内山余カ所有地ヲ挙テ建碑ノ地ト定メ、翁カ騎馬ノ像ヲ銅造建置シ、其功績ヲ不朽ニ伝ヘントス　幸ニ〔欠字〕殿下及貴顕ノ御賛成ヲ得タリ因テ速ニ竣功ヲ見ントス　最モ拙老ハ翁ノ旧交義ニヨリ率先此挙ヲ主唱スト雖モ建碑事務ニ至ツテハ拙老ノ能ク堪ル所ニアラス　不日其人ヲ得テ悉皆之レヲ委託シ　而メ建碑事務所及監督理事会計等ノ主任ヲ定メ　以テ一般寄付金募集ノ方法并ニ其取扱手続キ等ヲ広告スヘシト雖モ　先以テ此事柄ニ対シ広ク有志各位ノ賛成ヲ得ント欲ス　請フ大方諸彦ヨ故翁ノ功績ヲ追想セラレ拙老ノ微志ヲ助ケ賛成ノ意ヲ表セラレンコト冀望ノ至リニ堪ヘサルナリ

追テ御賛成ノ諸君ハ住所姓名ヲ記シ当分ノ内東京市木挽町二丁目拾三番地水明舘内仮事務所へ向ケ御申込相成度候

京都東山

明治二十二年十一月

建碑主唱者植田楽斎敬白

画面を見ると実に堂々とした洋風の記念碑で、工学士河合浩蔵設計とある。河合は明治十五年に工部大学校造家学科を卒業し、工部省でエンデーベックマンに委嘱した中央官庁建設計画に従事し、十九年に職人を引き連れて渡独し、エンデーベックマン事務所に学び、二十二年に帰国した。だから、この建碑計画は帰国直後のことであり、まだ工部省に籍があったときのことである。気宇壮大な中央官庁計画は幻に終わり、その後河合は三十八年に神戸で建築事務所を開設し、今に残る建築は関西に多く、神戸地方裁判所（明治三十七年）、造幣博物館（明治四十四年）、小寺邸厩舎（明治四十年代　重文）などが知られる。殆どが本格的な洋式建築で、本場に学んだ西洋建築技法をこなし流麗でかっちりと仕上げる腕の冴えを見せている。

植田の計画は樺山資紀、九鬼隆一が同年十月に呼びかけた銅像図案募集に応えるものであったのかもしれないが、植田の死去によって実現はしなかったようだ。藤田は軍服姿の西郷像を塑像原型を作成したが、二十五年東京美術学校に銅像制作が依嘱され、折からの国粋主義にあおられてこの計画も木造による原型と和式鋳造で完成されることになる。三十年には岡

倉校長が辞任することになるが、鋳造は岡崎雪声によって三十一年五月に完成し、台座は美校嘱託であった塚本靖が監督した。岡崎は岡倉に殉じて退職し、日本美術院で活動を続けるがこのとき手がけた豊橋の神武天皇像は「軍隊招魂碑縮図」〔図2〕に描かれたもののようである。こちらは二十八年一月に陸軍少将別役成義ほかおもに豊橋第十八連隊の関係者によって戦没軍人を追悼するために発起されたもののようで、とくに銅像にも基壇にも作者名が記載されていない。こちらの計画は十五号で取りあげた新潟の神武像と同じ明治四十年に実現し、八町練兵場（現在豊橋公園）に残っているが、版画と異なり立像で台座も別なデザインとなっている。その後公園内に移された旧藩主を祀る豊城神社と一体となって今に到っているようだ。

時期の近いふたつの計画をこれらの版画を観察すれば、図2の亀甲積みの石垣に自然石の頂部という手法は近世までの宗教的記念碑によく用いられ手法であるのに対して、図1は洋式軍服に騎馬像というだけでなく、円形と方形の切石積みや装飾的な柵や扉はいずれも純欧風手法であり、わずかに中段の浮彫が狛犬風であるところが和風であるように見える。騎馬像を見上げる左右の犬は雌雄の洋犬であり、イコノロジー的に「忠誠」を象徴しているように思われる。西郷という存在が近世的道徳観に結び付けて語られることの多いことを考えると、この計画が現在の姿より相応しいかどうかはさらに議論が予想されだろう。総じていえば、図1が二人の西欧美術を学んだ者によって、洋風の記念碑としての体裁と水準を備えているのに対して、図2が市井の感覚を反映して、近世的な記念塚風な様式を近代になんとか変容させた姿のようではなはだ興味深い。

絵葉書三昧3・藤島武二の《三光》

山田　俊幸

○逓信省の日露戦争絵葉書

日本の美術絵葉書（画家のかかわった創作絵葉書）のトップに何をもってくるかは、人それぞれに考えがあるだろう。だけれども、日本の絵葉書がその質をもっとも高く上げた時代が、絵葉書の草創から数年たった明治三十七、八年であることは、誰しも否定はしないだろう（もっとも、ある図案家は明治四十年を「絵葉書趣味高潮時代」としているが、この四十年は上質の絵葉書が衰退する直前の時代でもある）。ところで、その時代には何があったか。これは問うまでもない。「戦争」である。

この「戦争」が日本とロシアの戦いであることは言うを俟たない。その日露の戦役があったのが、明治三十七年から三十八年にかけて。今は「日露戦争」と呼ぶが、当時は「明治三十七八年戦役」と呼んでいた。この戦役の時代が明治三十三年から解禁になった私製絵葉書の大流行の時代と合致しているのだ。美術絵葉書の年代からすると、この戦役絵葉書の時代とほぼ同時期に、三宅克己や大下藤次郎の水彩画絵葉書の時代があるのだが、それは石版刷りで水絵の具（水彩画）のテーストを出そうとしたものであり、質的にはけっして印刷の上からも絵画の質からも上質なものではない。ただ、日本画の絵の具を木版の摺りに相応させたために、水彩画の刷りを石版印刷に対応させようとした努力はこの場合、相当にかわなければならないだろう。だけれども、それらの絵葉書は結局は安価なこしらえだった。

こうした、安価で普及目的の絵葉書の群れとは違い、戦役にかかわる絵葉書には、国家事業的とでもいうか、何というか、非常に質の高いものが多い。切手の世界では以前は高く評価されていたのだが、今はやや凋落気

一寸

第十九号　二〇〇四年八月

第十九号目次

新・旧刊案内19
雑感いろいろ、あるいは昭和十九年の木村仙秀　青木　茂　1
秋朱之介の『以士帖（えすてる）』、川上澄生、深澤索一、棟方志功の版画頒布のことなど　岩切信一郎　6
残されたひとやま《つき》（その4）
—藤牧版画の後摺りについて9　大谷　芳久　11
小山正太郎研究拾遺（二）
比叡山麓山中村・奈良・吉野　金子　一夫　18
弄蘭荘愚記　丹尾　安典　22
日本最初の銅版画展覧目録　銅・石版画遺聞17
附「玄々堂紀念　日本銅版畫展覧目録」　森　登　26
西郷隆盛像建設経緯寄与—自業自得の夏　森　仁史　31
絵葉書三昧3・藤島武二の《三光》　山田　俊幸　33

新・旧刊案内19

雑感いろいろ、あるいは昭和十九年の木村仙秀

青木　茂

■本誌先号に私は昭和十七年末に『戦争はまだやってゐるかね』と放言した人たちのことを記し、山川勇一郎さんの画集や遺作展のことを唐突に記した。勇一郎の弟さん山川武さんの病いが重いことは前から聞いていたので、たとい読まれなくとも山川さんの生あるうちに私の思いを綴ろうとしたのだった。先号が出てすぐに山川さんは長逝された。六月二日、私は孺子に美術史のおもしろさを教えてくれた盧雪の研究を、酔ったので（酔わなくても）枝葉も末節も思い出せないのを苛立ちながら独りで通夜をした。手許にはお弟子さんたちが望んだ論集はなく、共に旅した山西省大同の街角なども写っている。

・『山川武写真集』平成十四年十月、B5変形、私家版、原色写真七七点を繰りながらであった。点鬼簿の人が増える。

■『日本古書通信』の編集者に「版」とか「刷」とかは何だ、と聞かれて困った（同誌本年六月号参照）。言葉どおりの「再版」「増補版」ならば誤植や誤字は直せるだろうに、日本の出版社は何百版といいながら誤植も直さず、小娘の営業用芥川賞受賞三文小説を改版もせず刷りに刷って百万部売れたという。刷りに刷って返本の山で借り倉庫が埋まったりし、これが出版業の面白さということになり、意外の注文に買い取り原稿なのに少しだけ色を付けたりすることになる。

ところで、昭和十七年後半から敗戦しばらくまでの出版は、用紙の配給制度があり、検印があったために出版部数がほぼ分かる。統制経済は思わぬところで後世に何かを考えさせる緒を与えてくれる。試みに手許にある